

茶聖利休居士記錄

67

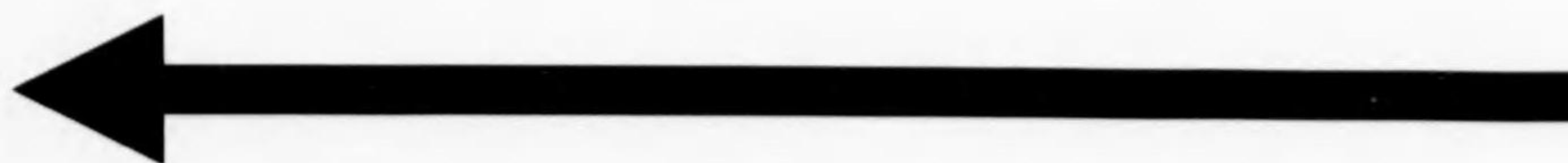
67-572



1200501281823



始



昭和十五年居士三百五十年忌施本

茶聖利休居士記錄



高木文

編著

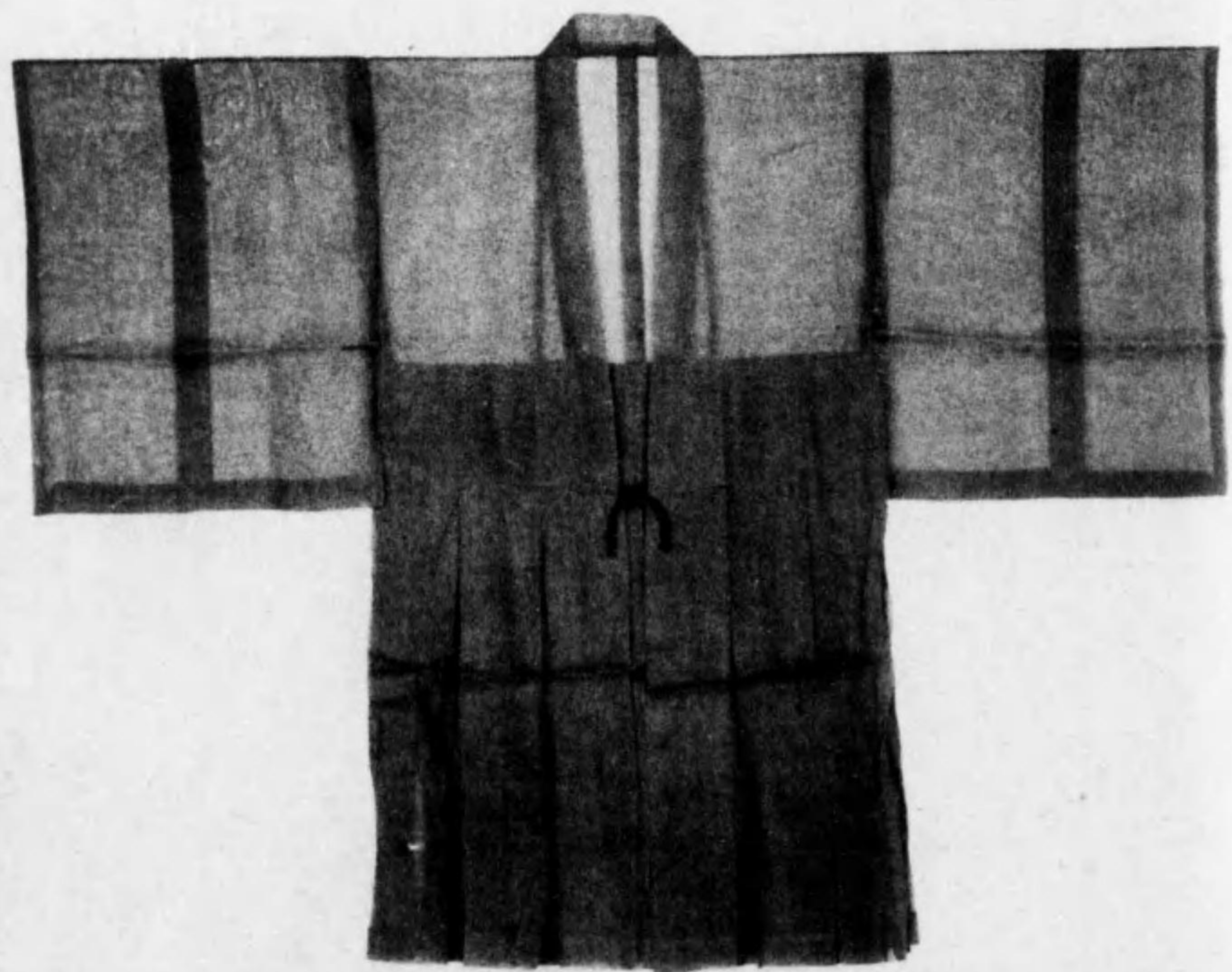


67
572

目次

- 一、利休居士衣……………
- 一、利休居士を偲びて……………
- 一、千家系譜……………
- 一、千利休由緒書……………
- 一、利休自筆茶會席記……………

表紙 居士衣色
扉 三百餘年前の銅活字



△利休居士衣

(舊徳川家傳來)

紀伊國主從一位權大納言徳川治寶卿

千家茶道お預中御召(本文参照)

裂地は茶地細糸紗左右四ヶ所に紐あり

利休居士を偲びて序となす

利休居士が世を去つて三百五十年になる、我國古來の諸藝道の内獨り茶道のみが興廢の跡なく今日に至り猶其隆盛を見ることは利休居士の餘力と云はねばならぬ、又我國古美術の進歩と其保護されて今日吾人のまみゆることの出来ることは茶道の力大なりしこと、王侯貴賤の差別なく茶道によりて美術の賞鑑愛護し來つた我國民性のしからしむる處である、更に又茶道はよく美術を愛護する様に出來てゐることに吾人は感服をする次第である。

其昔し利休居士と共に幾多の茶人が輩出してゐるのにも關らず獨り利休居士のみが中興の祖として人々の膾炙する所以のものは居士の生涯を通じてよく藝道に精進し子孫よく傳統を護りて來た所謂餘慶ありであつた、しかし其裏面には三百年の永い間よき保護者のあつたことも忘れてはならない、それは徳川氏の權勢の下に保護されてあつたからである。

利休居士は齡い七十の老軀を自刃の最後、しかも梟首の極刑は餘りにも悲惨な終了であつた居士は右大臣信長に仕へ豊太閤に愛せられ座右にはなくてはならない人物を何故切腹をさせなければならなかつたかは吾人が知らんとほつする所である、果して世に傳へられてゐることの「山門木像の一件」或は「娘奉仕の一件」又は「道具賣付の一件」等の單純なる纒言であつたこととは考へられないのである、秀吉の人物、利休の人物とを研めて見るならば、私は一意見を持つてゐるけれども、常に吾人と共に斯道敬服してゐる居士の追悼の志にして考證家としての立場ではないから茲には論じたくないのである。

豊太閤薨じて後ち徳川家康は少菴の流罪を赦免し千家を幕府に仕へさせることは利休の生涯を知るばかりではなく、少し理由があり又子孫としても仕官を望まないだらうけれども、茶道の傳統を遺すことは考へてゐたので幕府の親藩たる紀州藩徳川家へ仕へさせ、千家茶道保護の爲め御數寄屋頭の名目の下に出仕なく在京のまゝ捨扶持を與へられてゐたのである、爾來徳川

氏の滅びるまで二百餘年の間安んじて千家は茶道藝術に盡して來たことは吾人の既に知る所である、其間に藩主十代從一位治寶卿は啐啄、了々二代より茶道の奥儀をうけられ文政八年了々齋死して吸江齋未だ幼年なれば成長に及ぶまで藩主自から千家茶道お預の旨申渡され千家番頭住山揚甫をして吸江補佐を命ぜらるゝ等の用意ある千家保護に盡された一事を見ても藝道保護の他に餘り類を見ざる美事にして千家茶道の今日に在る所以である、千家代々も又よく徳川氏に仕へ道具の整理に力し千家道具の夥だしく徳川家に存するのはこれが爲である故に一見して「紀州御物」と世俗に謂ふのはこの故である。

私は何等茶道には關係なきも嘗て故徳川臥虎城侯の在世中其學問所に在り幾多の家記を閲し利休研究の備忘したる物の内左の古文書仍ち

一、承應二年と寛文六年兩度逢源齋宗左へ利休の由緒を藩命により答書口上書

一、文化年藩命により了々齋より千家系圖を奉呈せし原本



利休自筆會記
千宗印

千宗印

一、徳川家傳來利休自筆會記

等は利休生涯を研める上に貴重なる資料と考ふるが故に茶聖利休年忌に際し校訂紀念刊行し
吾人に示す次第である

昭和十五年二月

於賜架書屋

高木文

系譜

姓清和源氏

千氏

善政

少志

善政 継承

家紋 継承

一 元祖

古園城州
生國城州

田中千郎 小室名
不知

里見右衛門善政二男

東山慈照院善政公同朋お勤後

泉州保宗居住也

病死年月お知事也

一 二代目

生國泉州

千与 善政 実名
不知

千与 善政 実名

泉州保宗居住也父之名も一字也

礼苗字千と相改中也

病死年月お知事也

一 三代目

生國泉州

千宗 易

千与 善政 実名

初与 善政

号利休

拙谷 亦

織田治長公住源之末也

利休
身

之後人因秀吉之被承之紋を
下し給家之紋ラス

一 正親町院より居士之号を給

一 人徳寺より山ノ建之木澤と云ふ

而付秀吉公が智と号

一 天正十九年辛卯二月廿八日切腹後

于時七十歳

妻 堀宮尾道三、女 正五、七、十、十六、十九
後妻、紅米増正、正五、及後妻、堀宗四、正五、正七、三、六、九

知

一 淡田 生 淡州

宗為實子 豊領 初名 四郎 世宗四

号 少彦

少彦
か

父宗為智之弟 蒲中 元澤守

氏 御曰 秀吉公之次子 後 教 賢 忠

権現村 氏 郷 少 彦 曰

御書 弟 重 子 今 右 持 法 住 持 宗

為 法 師 宗 中 入 心 也 云 云

此書は方意のりかたのわき
中紙の巻はく

御講判

氏御判

十月十日

少店元

台徳院抄が少店取載は
御書にて有持は右字

書相續く心来候是
為ま止圖未助、子作也

御講判

十月十日

少店

台徳院抄科は家筋の御講判
は使はる少店候は 台徳院抄

古河新... 一... 百... 一...
 右... 少... 勤... 一...
 自... 年... 勤... 一...
 每... 江... 勤... 一...
 知... 乃... 一... 一...
 一... 年... 甲... 一... 一...
 一... 一... 一...



三

一 京都... 院... 院...

利休二男 十道安

長子母... 病... 度長... 二十... 二十... 一... 不... 亦...

号眠翁

利休女子 夏... 家...

三... 利休... 後... 父... 自...

利休女子 石... 比...

千... 初... 明... 一... 一... 一...

吟子母... 一...

一之代目

生五城州

十宗旦

少菴實子想作

元辰今日菴

号九伯

世々母

一之代目

は官を小好隠名を好之祖父利休
澄云との寛死の所去るを後悔不
議之利休は不審度なる兼を
秋の良宗且終は好まの流に好ま
宛子中二二歳に如るん先利休

道具の終りの事なる道を入書打

二揮宗旦終ひ

一 想傾宗上

南龍院地口より里の後に銘地

兼抄 治のりら利休不為求執治後

南龍院地口若上中ひ

一 万治元年戊子三月十九日病死は公

于時八十一歲

少詹事

渡田宗南

城州山科經流人

宗且普男

于宗控

兼應二癸巳六月六日病死
病死仕也

号宗翁

似休亦又官休是名于路別記一八三六

可

宗且二男

于宗守

号一翁

漢州廣仁院之五續仕也

一 延享二年己卯十二月十九日病死仕也
年齡不知也

一 六代目 生漢州

于宗以

不害庵

号江卷 逢源亦

寛永十九年二月日

千三十五

南龍院

知外武百云云

知外武百云云

知外武百云云

一 弟之湯

沙舞山

元成

御海

一 寛文十二

于時六十歲

宗且女子

宗且男

院月卷言室東千家祖今日卷左号地史

如州卷之七後流人住公

一五張十年廿七廿廿廿廿廿廿廿廿廿廿

正齡如知事

一七代目

江界生家子如領
實中万利如領官
生五城州

初家也

直字

号良体
施流亦

清溪院如印代

延定元九亥廿一月海日親宗凡為

記日清切意八拾石

个重十九年如勤中

壹修

沙身口注以注清安中上苑

印得清如注以月日

一九一八年七月十九日高死後 干時 四十二歲

江參二司 干宗巴

元禧元年六月廿日高死後 高死後 號及流亦

一 漢目 牛靈城州

干宗厚

女 三 號源安 號及流亦

元禧元年正月廿日親宗作爲

跡目神切云檢不以下重別所

清漢院神神隱居於此爲神神神神

年之以下重出德元年正月廿日

神神神神神神神神神神神神

八檢不以下重出德元年正月廿日

金院柳河代
一有德院柳

公儀口力 入山後家九派口居喜
子誠山儀河内之蓮

有德院柳河代此年保入癸卯年

十月日為素系指此及為華澤

柳兼碗持系有... 此代住此

一 享保十六歲年六月廿日為死... 守藏

身休女子

此年源家乃壽

一九代目

生靈城州

十宗乃

源安實子也依

初宗貞

号天然

如心亦

享保十六歲年八月廿日親家乃物

此目柳切兼七拾二... 个重山

一九代目年己未六月日身知

一 寬保二年癸未松平左近將監
是年秋他詔為新御茶抄御記入
此以外御茶入御茶抄御記入
御書合抄願仕也

一 延享元年甲子於若山表御
三枚以下重同元五年於

若山表御三枚以下重同
二十二年相勸中

一 寬延元年八月十二日病死於二十時
早十六歲

源史三男 十宗乾

松平源史及後日京使

只史

源史女子

京使町醫師

小尾芳安妻

源氏之官

松平源氏守殿前京位

千宗室

号一燈

一十代目

生玉城州

天保庚子恩領

初宗貞

為在口左面之面

源氏後宗貞

号清翁

字家祿

寶曆九年辛未本年十月九日親宗化

為跡目御切東去拾二以下宗貞
家業精於口中之旨也 治行也

八代源氏代

一明和二年戊午本年三月廿六日東去

江戸見習治行也 治行也

一同文成子二月十日家業精於相勤
治行御兼治行也 治行治行也

政令長沖野矣雲上白の如き

書院地帯

一安永六丁酉三月廿日家業官勅

付付是とて沖切東と比の地

百六拾石と 付付

一同一己亥と本年三月若山

沖地八丁同沖路友鶴沖領地

常沖

一寛政六癸七日廿日右様お勤御業

宣付付沖如増下敷合式百石

と 付付

一同辛酉同同是久理所目

換分家柄付付知式百石

以下重沖敷分直以上と付

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世
治世の世治の世
治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世
治世の世治の世
治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

一 治世の世治の世

下巻の数字は左に上巻の
 法則の数字の積を以て法則
 一周年同月廿四日臨在の法則
 多々ある事は古くより
 御目見申有る事は其法則
 法則の法則

天竺女子

京注町醫所

亦友堂初書

川口潤吉

法則

千宗元

初書

川口潤吉

千宗元

久田宗也兄瞻叙

川口潤吉

右通山院御書

千宗九

文比九甲子年十二月

子宗九

千宗九

千利休由緒書 (全)

承應二年紀州藩命により逢源齋宗左へ
利休事御尋の覺書並口上

送書...
日意二年冬...春

...



...
...
...
...
...
...

...
...
...
...
...
...

細川右京大夫勝元と申者、
御座候よし先祖より田中氏に而御座候就中
利休祖父は田中千阿彌と申候而 東山公方慈照院義政公の御同朋に而御座候 應仁元年五月山
名持豊入道宗全と細川右京大夫勝元と仲悪く被成夫より天下の大亂に罷成候其節公方御所に而
山名方え内通之逆心と申儀に而御近習の侍十二人書付を以細川勝元は公方え申上打果可申企に
付同年八月廿三日に 御所を立除き申候其衆中は一色式部少輔佐々木右京大夫上野刑部宮下野
守結城下野守伊勢備中守荒尾三上齋藤を始め十二人に而利休祖父田中千阿彌も其内に而御座候

千利休由緒書

承應二年癸巳ノ春 (徳川家康) 權現様御系譜御清選可被遊ニ付李一陽(紀州藩儒臣梅溪)
宇佐美彦四郎(同儒臣左助)ニ被仰付候就夫千宗易利休事入申候付其由緒を逢源齋宗左え御尋
之時節宗左御請之覺書

一利休先祖之儀者代々足利公方家に而御同朋に而御座候よし先祖より田中氏に而御座候就中
利休祖父は田中千阿彌と申候而 東山公方慈照院義政公の御同朋に而御座候 應仁元年五月山
名持豊入道宗全と細川右京大夫勝元と仲悪く被成夫より天下の大亂に罷成候其節公方御所に而
山名方え内通之逆心と申儀に而御近習の侍十二人書付を以細川勝元は公方え申上打果可申企に
付同年八月廿三日に 御所を立除き申候其衆中は一色式部少輔佐々木右京大夫上野刑部宮下野
守結城下野守伊勢備中守荒尾三上齋藤を始め十二人に而利休祖父田中千阿彌も其内に而御座候

細川右京大夫勝元と申者、
承應二年癸巳ノ春、
權現様御系譜御清選可被遊ニ付、
李一陽（紀州藩儒臣梅溪）
宇佐美彦四郎（同儒臣左助）ニ被仰付候就夫、
千宗易利休事入申候付、
其由緒を逢源齋宗左へ御尋
之時節、宗左御請之覺書
一利休先祖之儀者、代々足利公方家に而御同朋に而御座候よし、先祖より田中氏に而御座候就中、
利休祖父は田中千阿彌と申候而、東山公方慈照院義政公の御同朋に而御座候、應仁元年五月山
名持豊入道宗全と細川右京大夫勝元と仲悪く被成夫より天下の大亂に罷成候其節、公方御所に而
山名方え内通之逆心と申儀に而御近習の侍十二人書付を以細川勝元は公方え申上打果可申企に
付同年八月廿三日に、御所を立除き申候其衆中は一色式部少輔佐々木右京大夫上野刑部宮下野
守結城下野守伊勢備中守荒尾三上齋藤を始め十二人に而利休祖父田中千阿彌も其内に而御座候

千利休由緒書

承應二年癸巳ノ春（德川家康）權現様御系譜御清選可被遊ニ付、李一陽（紀州藩儒臣梅溪）

宇佐美彦四郎（同儒臣左助）ニ被仰付候就夫、千宗易利休事入申候付、其由緒を逢源齋宗左へ御尋
之時節、宗左御請之覺書

一利休先祖之儀者、代々足利公方家に而御同朋に而御座候よし、先祖より田中氏に而御座候就中、
利休祖父は田中千阿彌と申候而、東山公方慈照院義政公の御同朋に而御座候、應仁元年五月山
名持豊入道宗全と細川右京大夫勝元と仲悪く被成夫より天下の大亂に罷成候其節、公方御所に而
山名方え内通之逆心と申儀に而御近習の侍十二人書付を以細川勝元は公方え申上打果可申企に
付同年八月廿三日に、御所を立除き申候其衆中は一色式部少輔佐々木右京大夫上野刑部宮下野
守結城下野守伊勢備中守荒尾三上齋藤を始め十二人に而利休祖父田中千阿彌も其内に而御座候

千阿彌は堺え立除き名家をかへ隠れ罷在候 文明五年に山名宗全細川勝元病死其年東山公方義政公御隠居に而御子義尙公九歳にて御家督是を常德院殿と申候田中千阿彌も致歸洛御奉公申上候 長亨元年に公方常德院義尙公江州御陣中にて御他界田中千阿彌發心致し泉州堺え閑居仕候其子與兵衛は田中之名字改め父の名の一字千を取名字に致し千與兵衛と申候而堺今市町にて商家に罷成候其子與四郎と申候而今市町にて商賣仕候處茶道をすき候而後に武野紹鷗弟子と罷成剃髪いたし千宗易と名乗申候

一宗易師の紹鷗は何者にて有之候哉 宗左御受到承傳候に紹鷗は元若狹國主武田大膳大夫元信の二男伊豆守仲清應仁の亂に討死其子五郎信久幼少にて牢人と成泉州へ落下り申候其子武田因幡守仲村永正八年船岡山合戦之節細川右馬頭政賢に附戦功を抽て政賢討死にて落人に罷成又堺え引込武田と改武野氏になり南之端に住宅茶道を珠光宗珠に習ひ後京へ罷上り四條戎堂の隣家に居住大黒庵紹鷗一閑と申候茶道一流を開基仕候其比堺の津にて北向之道珍是又茶道一流之

大祖にて紹鷗と友にて候由紹鷗は弘治元年十一月に京都にて病死仕候由

一紹鷗師匠珠光は何者にて有之候哉 宗左御受到珠光は南都の稱明寺僧にて御座候還俗致し入洛六條堀川佐目牛の近邊に住宅東山公方義政公被聞召及珠光宅え御成茶を被召上候宗珠者珠光が弟子と申候又子と申候説も御座候

一利休は信長公へはいつ時分被召出候哉 宗左御受到堺の住人今井宗久(茶屋)津田宗及(天王寺屋)は茶道の名有之候に付三千石づゝ被下候條宗久は利休と親友にて候故信長公に申上候に付利休を(利休へ紹鷗ノ弟子也宗久紹鷗聳ト申故親友也)安土城へ被召寄茶之湯を被仰付候處すくれたる事故即座に三千石被下被召出候其後安土に相詰毎度の御茶之湯と茶堂被仰付無双之出頭にて御座候天正六年信長公上洛候次に堺え御立越宗久宗及道叱方え御成茶之會御座候刻利休宅へ御成にて御茶上ケ申候 信長公御生害の後は秀吉公え被召出不相替御奉公申上候由 一天正十二年春より秀吉公と家康様御弓矢をこり申候得共秀吉公御利運無之候に付御妹聲に

被成御和談に罷成候然共家康様御上洛不被成候故大政所様を岡崎へ證人に御下し被成候に付家康様御上洛被成候新町通三條猪熊の南中島清延宅に御着被成候此段秀吉公御聞早馬に而御旅宿(茶屋四郎次郎)へ御出家康様へ御對面其節利休は御茶入棗を襟にかけ秀吉公御供いたし家康様御茶辨當に而御茶を點し差上申候其時秀吉公仰には徳川殿此坊主御見知候哉と御問家康様見知候様に覺候と御挨拶秀吉公仰には是は千宗易と申候而當時天下之名人に而候と被仰候 家康様上意に誠に安土城に而度々逢申候成程見知候由被仰候 秀吉公仰には去年閏八月より聚樂城を取立候得共作事未全備不仕候間大阪城に而持成可申候吾等は明日大阪へ罷越候間家康公にも御越候得との事にて大阪へ御下り被成即大阪殿守に而利休を亭主に被成御茶之會御座候 秀吉公も御客に御なり家康様織田常眞公御同座に而利休御茶を上げ申候其時白雲の御壺不動國之御太刀を家康様へ被送候由夫より節々家康様御前へも利休罷出御懇に御座候由

一、利休御誅伐之次第は如何様之事に候哉 宗左御受に大徳寺の山門を再興仕候御咎に而御座

候大徳寺山門は應仁之亂の後大破仕候を取立候人も無之候處連歌師島田宗長再興仕候得共資料銀不足に而門計再興上の闇をば立不申候處を利休則門之上に闇を建候而額をも掛其身木像を造り置候に頭巾を冠らせ尻切をはかせ利休天下に秀出頭無双を構時に讒言仕候輩有之候に付秀吉公御機嫌損じ申候 龍寶山の山門は 主上も行幸被遊院も御幸攝家清伯の尊貴皆被通候其門の上に已が木像に草履をはかせ置候段不禮不儀不可勝計との御咎に而天正十八年の霜月より御勘當 翌十九年正月十三日堺へ被追下閉門被仰付候 加賀大納言利家より御内證に而大政所様北政所様を奉願御詫事申上候はゞ御免可被成と御申候 利休うけごひ不申天下に名を顯し候吾等が命おしきとて御女中方を頼候而は無念に候たとへ御誅伐に逢候とも是非なく候とて承引不仕 二月廿六日召に而京へ罷上り葭屋町の宅へ着仕候處弟子中の諸大名より利休かはい助んとの沙汰御座候に付秀吉公より上杉景勝へ被仰付侍大將三人足輕大將三人以上六組三千人計に而利休屋敷を取卷兩日番仕候 同月廿八日に尼子三郎左衛門、安威攝津守、蒔田淡路守、檢使に而切

腹仕候辭世の頌和歌御座候別紙に書付宇佐美彦四郎に相渡し申候

一、利休生害は娘ゆへに而有之との説有之左様之品も有事に候哉 宗左御受到世上に而は左様之品も申傳へ候しかと不得候 利休女子三人御座候一人は千紹仁が妻一人は石橋良叱が妻一人は萬代屋宗安が妻に而御座候世上に而申候は宗安が後家之事に而御座候様に申候私家にはしかと不申傳候 利休御成敗以後嫡子道菴は飛驒へ立除き金森中務法印を頼隠れ罷在候二男少菴は蒲生氏郷え御預奥州へ流罪に而候其後家康様利家卿の御奉書被下御赦免に而歸洛仕候秀吉公仰には利休方へ節々御成被成候時十歳計の喝食宮仕致し候是は子か孫かと御尋石田三成申上候は少菴世忤に而利休孫に而御座候と申上る利休缺所之中よき道具を三棹彼子にくれ候へと上意に而被下候此喝食は後に宗且と申候則吾等父に而當年七十五六に罷成京都に罷在此度の御尋も宗且方へ尋に遣し度し御受申上候少庵は舊宅本誓願寺下に葭屋町の宅は公儀へ被召上候歸洛之時に舊宅を拂ひ本法寺前に宅を引き構へ罷在候舊宅をこぼち取此方へ建申候故屋敷はかはり申候

得共家宅秀吉公家康公御成座敷に而御座候

一、利休切腹之後大徳寺え秀吉公より御咎候次第は如何申傳候哉 宗左御受到山門之上額をか
け利休木像を置候御咎之御使家康様利家卿細川忠興徳善院玄以淺野彈正五人に而御座候則大徳寺を破却可仕旨御内意五人の御衆中大徳寺へ御越法堂へ一山之僧衆を召集め御咎之上意被御渡候古溪宗陳を初め長老數輩と問答數度に及びし古溪宗陳は懷に匕首をさしひるます問答數刻家康様利家卿は上意を御述被成利休は賤輩凡夫たる者山門の上に木像おかしむる事尊卑の名分を不得是一山の僧徒の罪なりと被仰候古溪大音上げ佛法に王侯の品なし法に親しきを貴人とあがめ申候利休賤輩と云共佛道に親しく道を重く致し候へば佛道の尊貴なり然は木像をも置所也少しも一山の過失にあらず此上に此寺破却に及ば不及是非佛法破滅の時節到來也寺門と生死を同く可仕迂少らも不屈事不叶に及はゞ家康公利家卿と差違可死と思ひ切たる古溪氣色を家康公能々御覽被遊御顔色和らけ古溪以下の長老へ被仰候は被申趣道理も候間徳善院を初め長老達の

思切たる道義の氣色を御感被成御落涙にも被及何分にも御前は可申披間御心安く候へど御歸其段秀吉公え被仰上大徳寺別儀無之候由利休首をば一條反り橋にて梟首被成數日御さらし被成候と申候古溪長老には家康様御差圖にて市原の常樂庵へ閑居被致候

是迄は承應二年の御尋に而逢源齋御受

逢源齋口上に而一陽彦四郎えの物語(寛文六年の頃 承應二年より十四年後の事なり)

一、小田原陣の時北條美濃守氏規が韭山の城を四國衆十一頭に而攻る秀吉公より大竹ある事を被聞召利休を被差越城中へ矢文を射入大竹御所望有之花入を利休に被仰付一つは尺八と名を付て秀吉公へ献す一つは園城寺と名付子の少庵宗淳にくれ候 昨年十一月讒言に而利休を秀吉公御惡み出候而天正十九年正月十三日に堺へ被追下閉門二月廿六日に被召登上洛同廿八日切腹被仰付候利休京着より上杉越後宰相景勝卿に被仰付兵士數百騎弓鐵炮四百挺に而利休が家の四邊をかこませる是は多年大名數輩を弟子に取諸大名の懇志誠に不淺ゆへ利休へ加勢杯有歟又は密

に立除せる品も可有かと御氣遣也二月廿八日に蒔田淡路守尼子三郎左衛門安威攝津守檢使也

一、其内蒔田淡路守利休切腹せば介錯可仕と被仰付上杉景勝より番に來り候六頭の内岩井備中守は謙信の差圖に而先年より利休茶道の弟子たる故に切腹可有旨内證を利休に告るに付茶の湯の支度して檢使を待腹をか切脇差之柄紙捻に而卷て檢使の來るを待三使を不審庵へ申入一會して後切腹蒔田淡路は無二の弟子なれば上意にて介錯利休妻女宗恩白小袖を持出て死骸へかける辭世の詩歌の文は堺の町人方に所持利休首は聚樂御城へ蒔田尼子持參候得共實檢に不及一條戻り橋に獄門に梟大徳寺の山門の上に置たる利休が木像を柱を立結付利休が首を鎖がけに乗て木像に踏せて曝毎日の見物群集をなす

一、韭山にて被仰付利休作の尺八と云花入御床に掛り有りを御惡みの餘り二つに打わり庭へ被捨候を今井宗久密に取て漆にて纏用ひ天下の名物となる今堺の住よしや所持也

一、利休嫡子道庵は飛驒の國へ除き隠る二男少庵は閉門し上意を待て奥州會津へ被流蒲生氏郷

に御預り被成其後讒言にて利休冤死の段秀吉公御聞届被成御後悔不淺候其前利休が不審庵へ御成御茶を被召上候時宗且は利休孫にて八九歳也喝食の躰にて御茶の湯の御給仕仕るを能御覺被成聚樂の時分利休方にて宮仕勤たる喝食十二三にも最早成る少庵が子の由御聞被成是に利休が道具を被下置との上意にて名物珍寶の入たる長持三棹を拜領宗且は天正八年に出生萬治元年極月廿九日に死去八十三歳也或は八十一歳と云説も有之候

以上

一、逢源齋口上にて李一陽宇佐美彦四郎に物語の覺 天正十九年正月利休御勘當彌極り堺へ追下候時京を出候砌小棗一茶半袋を左右の手に持乗物に乗候節硯紙取寄て狂歌

利休めはとかく果報のものそかし菅丞相になると思へば

右の一首豎紙に書て卷納め封目を付上書にお龜に思置利休と書てお龜に渡し候へとて出るお龜は利休娘萬代屋宗安が後家也二月廿六日京へ被追上同二廿八日切腹辭世に曰

人生七十 力圍希咄 吾這寶劍 祖佛共殺
提る我得具足の一つ太刀今此時そ天になけうつ

抛筌齋 利休

且 藏 司 へ

右利休切腹可致砌檢使衆三人不審庵にて最後の茶會して織筋の茶碗と自作の茶杓を茶堂の少庵に與る遺狀に

おりすじの茶碗細工の茶抄形見として遣し置候被思出折ふし一服一會可爲本望候以上

天正十九年二月廿八日 利休居士

少 嚴 老

右の書付並茶碗茶杓少嚴秘藏致し候後少嚴は福島左衛門大夫正則へ五百石へ初め三百石後に古田織部此少嚴を喪申に付二百石加増にて出申候廣島にて茶會に右の道具利休自筆の狀坂井

主膳度々見被申候由物語にて候

右にも申候通二月廿六日利休を堺より被召上候刻諸大名を御氣遣上杉景勝へ番を被仰付景勝より岩井備中守色部長門守澤根刑部千坂兵部甘糟備後瀉上彌兵衛六組三千餘の軍兵にて番を致し廿八日に三人の衆中御檢使にて切腹

一、台徳院様の御時其家を御おしみ常菴を被召出紫野古御所と云所にて一圓に五百石を給る御禮に參勤の時一休自筆の平家物語を全部献上毎年年頭の江戸參勤に草臥御知行を差上閑居

右是迄古宗左物語

秀頼公御小姓古田九郎八直談十市縫殿助物語

天正十七年二月秀吉公東山邊へ御鷹野に御出黒谷吉間邊御歩にて鷹御すへ御通の時畠中にて花見の歸と見へて年の頃三十餘の乗物を供にもたせ幼児三人つれ下人男女十人計にて參逢御先を木下半助參り上様御成にて候間脇へ片付候へと御先を拂ひ候故彼花見の女房子供下人共に柳

陰にかた付つくはい居る秀吉公御通御覽被成に主人とおほしき女房容顔うつくしく世に類少く年もいまだ三十計盛に見へ候に付御供の御小姓衆御使にて何者の妻女に候哉と御尋候へば千利休娘にて萬代屋宗全後家にて候と申上秀吉公聚樂へ御歸被成出頭人の尼幸藏司を御使にて彼女房かたへ御書を被下聚樂へ御奉公に出候へとの仰せ彼女房御返事に幼少の子供餘多御座候間御奉公に出候事不相成候御免被下候へと申候上意に不應 秀吉公は徳善院御使にて父の利休方へ此旨被仰下候利休存候は娘を御奉公に出し候而は何事にも利休は娘の影にて仕合よしと人に被思候ては只今迄の佳名皆水に成候中々存も不寄と志を極御請不申上三度迄被仰遣候得共利休會て御受不申候に付甚以御にくみ深く被成候然共此儀にて御咎は天下の人口を御遠慮にて御差置被成利休が誤りあれかし其序に御誅伐可有と思召候處に大徳寺の山門の事御耳に達し遂に利休を御誅伐被成候よし古田九郎八直談を長會我部盛親方にて十市縫殿助聞候て大阪落城以後に十市縫殿助物語なり九郎八は古田織部正の嫡子也 秀頼公の御小姓組也

利休茶會席記

△今日利休居士自筆の茶事日記の斷簡が各所に見うけるのであるが多いのは徳川家に存してあるのは全長七尺九寸の卷に了々齋が装幀をしたもので以前にはどれ程あつたものかは今日知るよしもないが、昔から利休百會記と云はれてゐるけれども居士が筆にまかせて書留て置いたもので何も百會と限られたものではあるまい、もつと存在してゐたにちがいないと私は思ふのである成程今日知られてゐるのは九十四回であるから百會あつたものだと思像されたものと思はれる、此記を読むと居士の用ひた道具、會席或は如何なる人々が來席したかを思ふと趣味の油然と沸くものがあるので卷末に附記した次第である。

利休居士
茶事日記
百會記
朝露の
け

くらからん

子又らり

尺八素足

後持主切

侍せぬら

右三ノ

新

食

白

子

子

子

子

なぬあ

日

回

口

子

子

上

新

子

子

子

子

十の舞のついで

ついで

ついで

ついで

ついで

十の舞

舞

ついで

舞

ついで

ついで

ついで

ついで

ついで

ついで

ついで

ついで

ついで

十日早書

御書

百福の巻

信長様

美事なる

ことなる

ことなる

香房

信長様

之

御書

汁

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

の脈は星々

目まじい汁煮の味

口の食

水のつまみぎりの味

はちみつ

香皿 ちりちり

人ニ

一法はなすはなすはなすはなす

一なるはなす

一なるはなす

一なるはなす

一なるはなす

あつちい
やまよ

一 孝行の心

一 孝親善ま
くられ

一 上欄：心さく

一 孝行の心

一 孝の心
ちま
り
た
ま

孝の心

孝行

孝行の心

孝行の心

孝行の心

孝行の心

孝行の心

孝行の心

孝行の心

孝行の心

孝行の心

松平信行
とす
世に

仁者舟をさぐりて

一 舟を巻 水柱聖合

一 願きくちん

一 名はののしるふの
心

一 も 標し目 行 供
天目

一 下の柳 供の 新 時
基

と 誠 在 文

上 様 持 姫 社 々 々 々

印 一 列 成 米 所

由 為 在

詠
言 辨

答 石 氏

石川...
りくいの...
おぼね...
う

おぼね...
おぼね...
おぼね...

一四拾石...
おぼね...

果...
おぼね...
おぼね...

一...
おぼね...
おぼね...

一...
おぼね...
おぼね...

一...
おぼね...
おぼね...

一...
おぼね...
おぼね...

おぼね...
おぼね...

はるかな

わさびの味 山折

三ふんふんふん

新巻の味

汁 味のかけ

食

はるかな

梅屋

八月十七日晝

矢部久右衛門

二疊

草部屋道悦

雲龍の釜

おりため茶抄

黒茶碗

わけもの水さし

南蠻物共ふた

瀬戸水こぼし

小なつめ

閑居の壺

申鮑、鶴汁

鱈、食

菓子

さは柿、麩のけしあへ

八月十八日朝

毛利輝元

二疊

雲龍の釜

肩衝四方盆

わけもの水さし

黒茶碗

おりため

竹輪

瀬戸水こぼし

閑居の壺

串鮑、菜汁

鱈、食

引て 生鯉

菓子 いらかや

麩のやき、椎茸

御跡見茶の湯前の如し、堅田兵部、佐世與左衛門、長崎源右衛門、鹿戸善兵衛

八月十八日晝

薬師院

二疊

良壽

雲龍釜

宗純

わけ物水さし

茶入かたつき

黒茶わん

おりため

竹輪

瀬戸水こぼし

閑居の壺

雲さいせんはいり

みそやき汁

鮎鱈、食

菓子

あこや、しい竹

九月十三日朝口切

上様

四疊半

施薬院

いろり四方釜

柘植左京

瀬戸水さし

あけの井戸茶碗

御膳杉足折

肩衝四方盆

鰻、納豆汁、食

おりため

御二、鳴御汁、鯛焼物

竹輪

御菓子

瀬戸水こぼし

柘榴、焼栗

はしたて

上様御跡見、四疊半、有馬中務、富田左近、休夢、宗無、久阿彌

雲龍の釜

曲物水さし

筒井の井戸茶碗

小棗

おりため

同日晝

廣間 御膳

一、串鮑 桶やきみそ 香のもの

水あへ あつめ御汁 御湯漬

御二 うなぎ かまぼこ

御菓子 せん餅 麩 かや こねり柿 薄皮 五種

九月十三日晚

圓調一人

四疊半

四方釜

廣間にてめし

瀬戸水さし

なつめ

あけの井戸天目

橋立

九月十四日朝

古溪 和 尙

四疊半

春屋 和 尙

四方釜

瀬戸水さし

豆腐くす煮 菜汁

茶入尻ふくら

引て 酢あへ めし

黒茶わん

ふのひちに

おりため

菓子 やき栗 こねり柿

竹輪

ふのやき

九月二十日朝

水野 監物

二疊

武田 左吉

雲龍の釜

わけ物水さし

串鮑 鱈汁

長ひねり茶碗

鱈

水きん御茶屋

引て 生鯉やきて

廣間にて

菓子 栗焼 麩の焼

はし立の御茶

はしにて出る

九月二十日晝

筑前博多神屋宗湛一人

二疊

雲龍の釜

串鮑 白鳥汁

曲もの水指

繪 めし

茶入天下第一

菓子 焼栗 麩の焼

ながひねり茶碗

折ため

竹輪

橋立

九月廿一日朝

小早川隆景一人

四疊半

四方釜

桐の遠棚袋棚也

瀬戸水さし

ほつた臺に

薬師堂天目

天目の中へ尻ふくら入一ト去引
がうし水こぼし

橋立

子昂の硯龜の水入

九月廿一日晝

水指上の棚上置飴
吉川藏人一人

鮭焼物 鴈汁

山椒十粒 めし

柚味噌

菓子 こんにやく

焼栗

柘榴

四疊半

茶の湯如今朝

麩のひち煮 八寸に引て

うなぎあぶりて 鯛の焼物

菓子 麩の焼 焼栗 いらかや

九月廿一日晩

上 様

四疊半

輝元

四方釜

施薬院

瀬戸水さし

宗及

薬師堂茶碗

茶入しりふくら

鮭焼物 菜汁

鮓 御飯

九月二十二日朝

大友義統

おぼろ豆腐

御菓子 麩の焼 焼栗 いらかや

四疊半

田原四郎

桐棚袋棚の事也

鮭焼物 つみ入小鳥汁

茶湯如昨朝

とらふのそば 柚味噌

鮓 食

菓子 前の如し

九月二十二日晝

古田織部一人

四疊半

四方釜

鮭焼て 白鳥汁

瀬戸水さし

柚味噌 めし

茶入木の葉猿

引て 鱈

薬師堂天目

菓子 麩の焼 焼栗

折ため

竹輪

橋立

雲耳の花入

同日晝

この村屋宗活

四疊半

佐保姫持参にて口切

四方釜

瀬戸水指

鱈 鱈汁

木葉猿

鮭焼物なし

おりため

菓子 麩の焼 焼栗

竹輪

橋立

雲耳花入

廣間にて橋立の茶出され
毛利輝元一人

同日晩

四疊半

四方釜

瀬戸水指

茶入なつめ

鱈 鱈汁

うなぎ めし

菓子 栗 柿 かや

藥師堂天目

折ため

橋立

九月廿三日朝

本覺坊一人

四疊半

四方釜

曲物水さし

茶入尻脹

高麗三島茶碗

おりため

竹輪

椎茸 菜汁

葛煮牛蒡 めし

菓子 麩の焼 焼栗

閑居の壺

十月廿六日晝

四疊半

四方釜

瀬戸水さし

しりふくら

木守茶碗

おりため

橋立

十月廿七日朝

四疊半

鍋島豊後守

龍藏寺六郎四郎

鮭焼物 鱈汁

法輪味噌 飯

引て 鱈

菓子 麩の焼 焼栗

宗對馬守

柳川權左

四方釜

肩衝四方盆

鮭焼物 たたき汁 食

宗甫棚休臺子也

鯨 吸物

瀬戸水さし

菓子 ふのやき 焼ぐり

木守茶碗

かねの水こぼし

おりため

同 廿七日晝

筑前博多宗室

四疊半

柳川 藤内

橋立

欲了庵墨蹟

鮭やき物 白鳥汁

四方釜

くろめ 食

瀬戸水さし

菓子 ふのやき 牛蒡

茶入大棗

木守茶碗

もんさす水こぼし

十月廿八日朝

戸田民部

四疊半

牧兵太郎

四方釜

芝 監物

瀬戸水さし

しりふくら

鮭焼物 納豆汁

木守茶碗

香の物 さんせう 食

おりため
もんさす水こぼし
てふの花入
菓子
ふのやき
椎茸

十月卅日朝

加内膳

四疊半

河尻肥前守

四方釜

宮木藤八郎

瀬戸水さし

船越五郎左衛門

しりふくら

木守

鮭焼物
納豆汁

おりため

くろめ食

閑居の壺

引 鯉のさしみ

一節の筒
菓子
ふの焼
椎茸

十一月二日朝

堀尾帯刀

二疊

山田對馬

雲龍の釜

仙石權兵衛

曲物水さし

肩衝四方盆に

鮭焼物
納豆汁

木守茶碗

串鮑食

くろき象牙の茶抄

菓子
柑子
椎茸

瀬戸水こぼし

欲了庵墨蹟

同日晝

上様

四疊半

天満新川

四方釜

薬院

瀬戸水さし

茶入尻脹

串鮑 納豆汁 香のもの

薬師堂天目

鮭焼物 食

ほつた臺

引て 鯉さしみ 中内ノ汁

象牙の茶抄

菓子 椎茸 せんべい 焼栗

ほつた水こぼし

焼餅

尺八の花入

御跡見 金森法印

富田左近 柘植左京

十一月三日朝

蜂須賀阿波守

四疊半

増田右衛門

四方釜

中村式部少輔

宗甫棚に

しがらき水指

かまぼこ たくきな汁

薬師堂天目

くろめ かけめし

しりふくら

引て 鮎 鱈

象牙の茶抄

菓子 ふのやき 椎茸

もんさす水こぼし

いりかや

閑居の壺

十一月四日朝

周防山口宗古一人

四疊半

四方釜

廣間にて 食

信樂水指

茶入小棗

藥師堂天目

象牙茶抄

もんさす水こぼし

橋立

同日晝

松岡右京一人

四疊半

四方釜

しがらき水さし

かまぼこ 汁

ひしこ かけ食

尻脹

菓子 麩の焼 椎茸

藥師堂天目

象牙茶抄

もんさす水こぼし

欲了庵墨蹟

十一月六日朝

津田隼人

四疊半

上田左太郎

四方釜

圓 乗 坊

しがらき水指

宗甫棚上

かまぼこ 茶入たたき汁

こしまや茶碗 同上に

くろめ 食

尻ふくら茶入 引而 鮎ぬた 給
象牙茶抄 菓子 前に同じ

もんさす水繻

花入尺八

閑居の壺

十一月七日期

新御門主様

四疊半

四方釜

備前つぼ

鮭焼物 鴨汁 くらめ 食

引て 鯉さしみ とうふでんがく

其外六日期の如し 菓子 ふの焼 椎茸

十一月九日晝

いたみや紹無 千宗 杷

廣間にて

油屋宗味 さいや流菴

四方釜

はりや宗尾 上杉久徳

瀬戸水指

道七 紹安

ひせん壺宗甫棚

紹古 宗安

木守茶碗

芒菴

茶入尻ふくら

鮭焼物 たたき汁

象牙茶抄

鱈飯

ほつた水繻

菓子 麩 うす皮

十一月十日期

龍野待従

四疊半

青木紀伊寺

四方釜

長曾部土佐守

宗甫棚に

小瀬信濃守

しんと瀬戸水指

ひきぎのさや茶碗

鮭焼て 納豆汁

しりふくら

くろめ 食

象牙茶抄

引て 鯉さしみ

ほつた水こぼし

菓子 ふのやき 椎茸

橋立

古溪墨蹟

十一月十一日朝

備前宰相

四疊半

小西攝津守

四方釜

住吉屋宗無

信樂水さし

しりふくら

木守

象牙茶抄

閑居の壺

古溪墨蹟

御跡見

同日晝

四疊半

四方釜

しがらき水さし

串鮑 白鳥汁

鱈 食

菓子 しいたけ ふのやき

中村又右衛門

天野

井原彦左衛門

鮭やきもの 菜汁

茶入尻ふくら

くろめ 食

木まもり茶碗

引て 鴈汁

おりため

菓子 ふのやき 椎茸

橋立

同日晩

羽柴與市

四疊半

四方釜

鮭やきて 茶烏汁

しがらき水指

くろめ 食

肩衝四方盆に

菓子 ふのやき 椎茸

木守

堀田水こぼし

尺八花入

十一月十二日朝

石田治部少輔

四疊半

佐竹左京太夫

四方釜

もすや宗安

宗甫棚に

しがらき水さし

串鮑 鴈汁

ほつた臺に

くろめ 食

薬師堂天目

菓子 ふのやき 焼栗

しりふくら

おりため

橋立

古溪墨蹟

同日晝

小西彌三郎

四疊半

青酢 鯛さしみ かき汁

茶の湯今朝の如し

くろめ 飯 菓子うは栗

十一月十四日朝

幽 齋

四疊半

柘植左京

四方釜

戸田民部

宗甫棚に

しんと水指

鍋焼 納豆汁

高麗小しまや

鯛さしみ 食

尻脹

菓子 椎茸 ふのやき

ほつた水こぼし

備前壺

古溪墨蹟

十一月十五日朝

立石紹林

四疊半

四方釜

鯛やき 鴈汁

宗甫棚に

くろめ めし

新瀬戸水指

菓子 ふの焼 焼栗

大なつめ

いりかや

木まもり茶碗

唐物かうしの水こぼし

備前壺

同日晩

紺屋道喜

茶屋

同 又七

きりのこかま

水さしわけ物

鯛やきて みそやき汁

小棗

くろめ 飯

薬師堂天目

菓子 麩のやき 焼栗

めんうつ

竹輪

をりため

十一月十六日朝

大文字屋養紹

四疊半

針屋 紹味

四方釜

同 宗春

宗甫棚に

新瀬戸水さし

鯛焼物 みそ焼汁

尻脹

くろめ 飯

挽木の鞘

菓子 焼もち にしめ麩

ひせん壺

かうし水罨

古溪墨蹟

十一月十九日朝

松岡右京

四疊半

四方釜

いり酒 鯉さしみ 鯉の中折汁

新瀬戸水さし

飯 引て 小鮎漬焼

肩つき四方盆

菓子 ふのやき 焼栗

木まもり

竹輪

おりため

十一月廿日朝

針屋宗知

四疊半

伊勢屋三阿彌

四方釜

新瀬戸水さし

鯉柿あへ ひたし汁

肩つき大夏目

かまぼこ 飯

茶通箱に入床臺

菓子 ふのやき うはくり

四方盆後に出る

瀬戸水こぼし

花入尺八菊の花を入

十一月廿一日朝

備前中納言様

四疊半

壽命院

四方釜

かまぼこ 平茸汁

瀬戸水さし宗甫棚に

鯉かきあへ 飯

木守

引て鴈せんはいり

肩つき入てちがい棚に置後四方盆に出す

尺八花入菊花を入

菓子 ふの焼 いりかや栗

うす茶は大棗

大かねの水こぼし

同日 中納言様御跡見 瀬田九郎太郎

振舞なし 茶一服 井戸忠右衛門

利休登城に付薄茶は紹安

十一月廿二日朝 長谷川右兵衛

四疊半 蒔田權佐

四方釜

瀬戸水さし かまぼこ 平茸汁

かたつき四方盆に 鯉かきあへ 飯

きまもり 菓子ふの焼 うばくり

竹輪

おりため

古溪墨蹟

十一月廿四日朝 浅野右京太夫支勝

四疊半 矢島久右衛門

四方釜

宗甫棚に瀬戸水指 串鮑 鴈汁

尻服 鱈飯

木守 菓子 ふのやき 焼栗

堀田水こぼし

閑居壺

十一月三十日朝

有馬中務

四疊半

富田左近

きりのかま

宗甫棚に瀬戸水指

鯛焼物 納豆汁

木の葉猿

鮎なます 飯

挽木の鞘

菓子 ふの焼 くり

かねの水こぼし

ひせん壺

同日晝

小島や道札 こんたや徳林

四疊半

祐乘 宗彌 たいしや宗有

四方釜

鮭焼物 納豆汁

宗甫棚茶の湯朝の如し 鯉さしみ 飯

備前壺出る

菓子 おこしこめ ふのやき

同日晝

篠原 彌介 井口猪右衛門

茶の湯如前

千秋式部少輔 和田將監

茶入めんとり

菓子 おこし米

十二月朔日晝

本住坊 宗和

二疊

堅佐道春

きり釜

わけもの水さし

鮭焼物 納豆汁

しりふくら

くろめ 飯

そと濱茶碗

引て さわらの子

閑居の壺

菓子 ふのやき 焼栗

十二月四日朝

有 樂 不 干

四疊半

芝監物 茶の時宗無出る

四方釜

信樂水さし

鮭焼物 みそやき汁

肩つき

鳩せんはいり 飯

外濱茶碗

菓子 麩のやき 焼栗

古岳墨蹟

あふら物

尺八花入

十二月七日晝

薬 師 院

四疊半

油屋常佐

四方釜

信樂水さし

鮭焼物 納豆汁

木葉猿

鯉かきあへ 飯

木守

菓子 ふのやき 焼栗

折ため

竹輪

子昂の硯記はかけず水入筆

同 七日晚

佐 竹 義 重

四疊半

澁川助右衛門

四方釜

信樂水さし

鮭かきあへ 鯛汁 飯

肩つき四方盆に

引て 雁せんばいり このわた

木守

菓子 ふの焼 打くり

折ため

竹輪

十二月九日朝

水谷伊勢守

四疊半

四方釜

鯛焼物 菜汁

信樂水さし

鯉かきあへ 飯

茶入小棗

菓子 ふの焼 栗 あぶりもの

木まもり

欲了庵墨蹟

橋立

十二月十日朝

下宮内郷

四疊半

覺 法

四方釜

瀬戸水さし

小鳥せんはいり 菜汁

小なつめ

かまほこ 飯

木守

菓子 ふの焼 あぶりもの

ひせん壺

欲了庵墨蹟

十二月十一日朝

宗 好

四疊半

四方釜

蒲鉾 みそやき汁

瀬戸水さし

このわた

肩つき四方盆に

鳩せんはいり 飯

木守

菓子 ふの焼 焼栗

おりため

橋立

欲了庵墨蹟

同日 跡見

米屋與十郎

四方釜

瀬戸水さし

鮭焼物 小鳥茶汁

茶入小なつめ

申鮑 飯

外濱茶碗

菓子 焼栗 ふの焼

おりため

橋立

一休墨蹟

十二月十八日朝

堺水落宗恵

四疊半

紹古

四方釜

外濱茶碗

小鳥せんはいり 鱈汁

信樂水さし

鮭焼物 飯

木葉猿

菓子 ふのやき やきくり

欲了庵墨蹟

肩衝に茶を入ずして四方盆に

薄茶は小棗

十二月十九日朝

石田 奎頭

四疊半

木下 半介

四方釜

信樂水さし

小鳥せんはいり きすやき汁

木葉猿

このわた 鮭焼物 飯

外濱茶碗

菓子 ふのやき 椎茸

ひせんつぼ

欲了庵墨蹟

薄茶大棗に

十二月廿日朝

御室 御所

四疊半

妙法 院

四方釜

日野大納言

宗甫棚に信樂水指

ほつた臺に

麩油揚げしす 味噌焼汁

薬師堂天目中に小棗袋に入れて

椎茸 飯

ひせん壺

引て 鮭焼物 日野殿一人

古溪墨蹟

菓子 麩焼 焼栗

かうし水こぼし

十二月廿一日

羽柴 筑前守

四疊半

宗 無

桐の釜

しがらき水さし

このは猿

木守茶はん

折ため

竹輪

春林墨蹟

十二月廿三日朝

四疊半

四方釜

信樂水指

ぬり折敷 みそやき汁

けし味噌 牛蒡 このはた 飯

引て 鯛焼物

菓子 ふの焼 焼餅 椎茸

福城坊

養藏主

圓阿彌

木葉猿

木守

おりため

竹輪

ひせんつぼ

十二月廿四日朝

四疊半

四方釜

信樂水指

木守

おりため

椎茸 味噌焼汁

葛煮牛蒡 飯

菓子 麩の焼 昆布

羽柴藤五郎

木村常陸介

寺澤忠四郎

鮭焼物 みそ焼汁 このはた

小鳥せんはいり 飯

竹輪

菓子

ふのやき

栗

小棗に茶入れ茶通箱に入

肩衝は後に四方盆にのせ床に置

欲了庵墨蹟

十二月廿四日朝

松田勝左衛門

四疊半

尾池清左衛門

四方釜

道 喜

信樂水指

大棗に

芥子酢油麩

みそやき汁

木守

牛蒡けしみそ

飯

折ため

菓子

ふのやき

栗

ひせん壺

欲了庵墨蹟

十二月廿六日朝

大谷刑部少輔

四疊半

寺西筑後守

桐の釜

信樂水指

塗折敷

鯛焼物

鴈汁

尻ふくら

このはた

飯

引て

榮螺つほいり

木守

菓子

ふのやき

栗

備前壺

欲了庵墨蹟

十二月廿七日朝

高山南坊一人

二疊

霰釜

まげ物水指

肩衝四方盆

折ため

黒ちやはん

尺八花入

正月八日晝

二疊

あられ釜

瀬戸水指

鯛焼物 雉子汁

山しよう 香物 飯

引て このわた さとい

菓子 ふのやき

油屋常佐

鯉さしみ 白鳥汁

このわた 飯 引て鮭焼物

木葉猿

黒茶碗

おりため

世なか筒花入

備前壺

正月九日朝

二疊

あられ釜

瀬戸水指

大棗

黒茶碗

菓子 ふのやき 栗

堀尾彌介

歸 齋

申飽 やき味噌汁

このはた 小鳥せんはいり 飯

菓子 ふのやき 栗

備前壺

正月十日朝

戸田民部

二疊

池田備中守

あられ釜

瀬戸水さし

くろめ 鴈汁 このわた

しりふくら

引て 鯛焼物 飯

木守

菓子 とくふのうばくり

竹輪

おりため

橋立

正月十三日朝 上様 羽柴筑前守

二疊

施薬院

桐釜

まけ物水指

串鮑 かき汁 鮎やきて

しりふくら

桐重箱上に あさつけ香物下

黒ちやわん

に御食をつき

すゞめ繪

御菓子 せんべい 栗

備前壺

薄茶は茶屋曲突にて

正月十五日朝

輝元

二疊

安國寺

あられ釜

まけ水指

皆朱中折敷

鮎

みそ焼汁

飯

しりふくら

引て

生鮑

わたむし

木守

菓子

いりかや

こぶ

焼餅

子昂硯記かけず

同日 不時

羽柴筑前守家來有賀類介

二疊

あられ釜

焼餅

曲水指

釜子

いりかや

椎茸

小棗

木守

おりため

橋立

同日 晝

大友 義純

三疊

高山勘左衛門

あられ釜

まけ水さし

皆朱折敷

鯉さしみ

茶入天下第一

味噌焼汁

このわた

飯

木守

引て

鯛やき

おりため

菓子

焼もち

いりかや

椎茸

ひせんつぼ

正月十六日晝

佐竹義宣一人

四疊半

四方釜

鯛焼物 みそやき汁

しからき水さし

生鮑 わたあへ 飯

尻服

鯉指身

木守

菓子 栗 かや おこし米

おりため

橋立

欲了庵墨蹟

正月十七日朝

小西和泉守

四疊半

同 如 清

四方釜

同 如 休

しからき水指

大棗

申鮑 鴈汁 さんしろう

木守

香物 飯 引て このわた

和泉守殿壺出る

菓子 ふのやき 栗

欲了庵墨蹟

正月廿二日晚

道 本

四疊半

鹽屋治郎左衛門

四方釜

しからき水さし

申鮑 鴈汁

大棗

このわた 飯

木守

菓子 ふのやき 栗

ひせん壺

正月廿五日朝

有馬中務

二疊

高山南坊

大釜

信樂水さし

このわた 鷹汁

尻眼

鯨飯 葛豆腐

ひきぎのさや

菓子 さとえ 栗

ひせん壺

雀繪

りうこ花入

同日晝

牧村兵太郎

二疊

戸田民部

大釜

わけ水指

このわた 菜汁

尻ふくら

さとえ 飯

ひきぎのさや

菓子 ふのやき いらかや 昆布

正月廿六日晝

上 様

二疊

有 樂

御拜領釜自在

杉のあしうち 葛煮豆腐

瀬戸水指

白鳥汁 御飯

かたつき

御二かけはん 御菜汁

薬師堂天目

食籠 うつら 香の物さんせう

おりため

御菓子 せんべい ふのやき

めんつう

正月廿七日晝

長東大藏大輔

二疊

山中吉内

あられ釜

瀬戸水さし

申鮑鴈汁

肩衝四方盆に

香物 さんせう 飯

樂茶碗

引て このわた

おりため

菓子 ふのやき 栗

竹輪

瀬戸水こぼし

正月三十日夜

戸田民部少輔一人

二疊

あられ釜

さざえ 鯛茶汁

瀬戸水さし

このわた 飯

大棗

引て豆腐

有樂茶碗

菓子ふのやき 昆布

ひらい瀬戸水こぼし

かや

閏正月二日晚

宰相様

二疊

宗安

あられ釜

瀬戸水指

鶉せんはいり かき汁

木の葉さる

このわた 飯

木まもり

引て鱈

菓子麩焼

栗

ひらいしからき水こぼし

橋立壺

壬正月三日朝

松平佐渡守

二疊

あられ釜

串鮑 納豆汁

瀬戸水さし

このわた 飯

肩衝四方盆

菓子 麩の焼 栗

木守

いりかや 昆布

おりため

ひらいしがらき水こぼし

竹輪

欲了庵墨蹟

同三日晩

伊丹屋紹無 同 む こ

二疊

米屋與十郎 もすや宗安

あられ釜

同 道 通

瀬戸水さし

小鳥せんはいり ふくたり汁

小棗

木守

このわた 飯

ひらい信樂水こぼし

菓子 ふのやき 焼くり

竹輪

欲了庵墨蹟

高麗筒に梅花入

壬正月四日夜

新門主

四疊半

奥門主

拜領釜

美作

しからき水指

木守

鯉 白鳥汁

大棗に

煮山しよう 香のもの

ひらい信樂水こぼし

このわた 飯 引て豆腐

竹輪

菓子 麩焼 焼栗

壬正月五日晝

加内膳

四疊半

舟越五郎左衛門

おぼたれ釜

宮木藤左衛門

宗甫棚

猪子次郎左衛門

しからき水指

小棗

鯉 鴈汁

せい高黒茶碗

鮭焼物 飯

瀬戸水こぼし

菓子 ふのやき 焼栗

高麗筒に花入

壬正月十日朝

福知三河守

二疊

大屋宗紀

あられ釜

しからき水指

鯉さしみ 白鳥汁

大棗

くろめ 飯

黒せい高茶碗

菓子 前に同

瀬戸水こぼし

尺八梅の花入

後に橋立出す

うす茶小棗

正月十一日朝

輝元一人

四墨半

四方釜

鯛焼物 汁

瀬戸水さし

鯉さしみ 食

くろちやわん

引て 白鳥汁

茶入なつめ

菓子 ふのやき

尺八に梅花入

やきくり二種

後に橋立出

佐世名三郎

少庵 林肥前

右三人廣間にて茶の時座敷へ出る

同 晩

島津兵庫

四疊半

あまのや宗也

四方釜

瀬戸水指

鯛やき物 汁

くろちわん

鯉さしみ めし

大棗

菓子 ふのやき くり二種

高麗筒櫻の花入 以上

十三日晚

有 樂 齋

四疊半

立 阿 彌

拜領の釜

くろちやわん

こま／＼小鳥に入汁

茶入木の葉さる

このわた たい焼物 めし

瀬戸水さし

引て でんかく

うすちや天下一

菓子 ふのやき やきくり

平大瀬戸水こぼし 以上

十五日晝

戸 田 民 部

熊谷半治二人

拜領の釜

信樂水さし

鯉さしみ かき汁

茶入しりふくら

かまほこ めし

くろちやわん

くわし ささひ

ひせんつほ

ふのやき こふ

欲了庵墨蹟

うすちや大棗

おりため

瀬戸大平水覆

朝

御 成

古 田 織 部

御膳杉足打

貝やき 御汁鶴 いものくき

引て 御食

杉のへきにけりのやま鳥 かうの物

御酒通りて

青皿に おろしなます ふかみ

くわし くりのもち ならのき やきふ

一御床無準禪師自畫讚

御手水の間

一床に舟

一せいたか

一めんつう

一柴竹の

一袋棚に差置かくれて

一上棚にひさく

一茶せん茶杓

一棚の下重せいたかふたをき

十六日朝

桑山修理亮

四疊半

青木紀伊

拜領釜

前野出雲

信樂水さし

茶入小なつめ

みそやき汁

はしたて

かまほこに引て めし

をりため

こいさしみ

竹わ

菓子 ふのやき くり

以上

廿四日朝

大納言殿御一人

四疊半

拜領釜

申鮑 みそやき汁

安國寺水さし

あへ物 食

茶入なつめ

引て うきあへ

木まもりちやわん

くわし ふのやき 栗

ひせんつほ

こふ

古溪墨蹟

つち物花入

御 跡 見

本 田 中 書

牧野半左衛門

鳥 井 左 京

安部野善右衛門

長井右近

松 本 紹 信

喜四郎次郎 七人

一伊賀焼水指置合

但重舟邊とんす

一瀬戸くろちあわん

一姥口のあられ釜のつき

一青螺の臺に新瀬戸天目

一下の棚に瀬戸の新き香盆

今織袋

上様御機嫌能而無申斗卯の刻に

御成未の刻に御歸巫

御相伴 玄朔 加藤左馬 石川玄蕃

ちさいの間にて相摸殿御花御座候

於伏見九月廿二日御飾

一四拾石口切茶青事無比類

四方盆に置也 手水の時左入

一しき肩衝おりため茶杓

一御釜おとこせ

一いと茶碗 御茶わん

一いもかしら水指 紹鷗所持

一天下一水覆 備前藝州ヨリ

御會席

あさきこきに山折敷

ゑひさこはんに入

引て 鮎煮テ大皿に 汁鴈のもけせり加テ 食

御茶會席

抛 筌 齋

昭和十五年四月

養翠亭藏版

施本百部印行

昭和十五年四月二十日刊

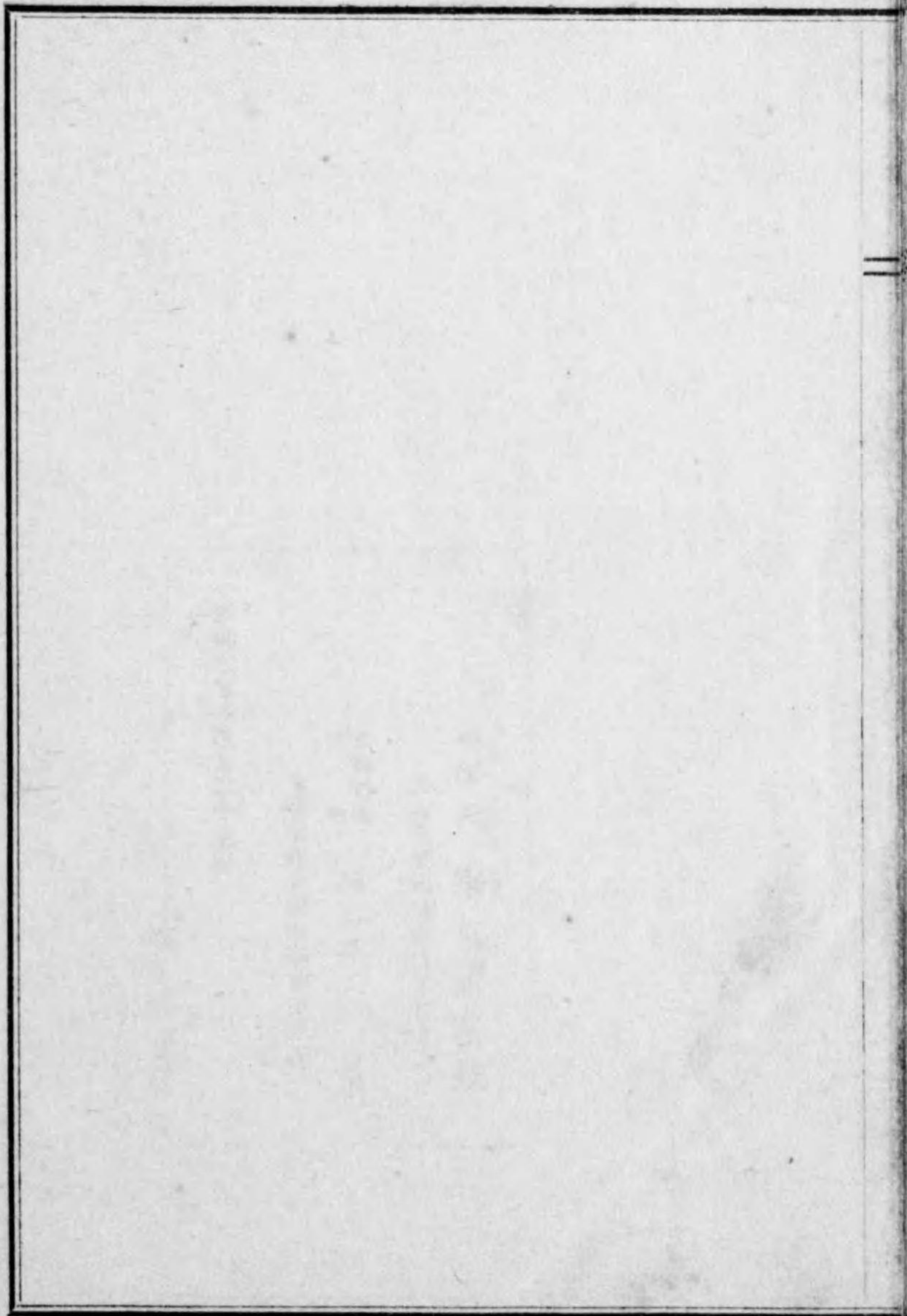
東京市澁谷區羽澤町十番地

著者 高木文
並發行者

東京市芝區新橋七丁目十二

印刷所 東京美術社

67
572



終

